

付る、他本に異にして何れか是なる事を不知もの、圖を本文のかた脇に付て、考正に是を辨ず、古書之誤、他本の異同を分やすから玄むるもの也、

一附録奥之棗二卷

右は本書八部之中、解がたき事、又は其餘意を述て、初心の人に便とす、

〔香道之雜書〕一香道軌範宗悟作と云々、焼失とて春淳門人へは不被出、尤藤野家には無之、宗先翁迄は在之、皆傳門人浪華江田世恭寫所持有しを、同住吉村周圭傳寫在、周圭が我等傳寫、其外天文雜書芳薰餘情榮松記六節七節等皆寫持しが、誠古書にて、右等之門より撰改正し、規矩定りし物故、焼失とて不被出事也、尤先無用の物也、

雜載

〔榮花物語月一の宴〕廣幡のみやす所女源明計子、ぞあやしう心ごとくに、心ばせあるさまにみかど上村

おぼしめいたりける、内よりかくなん、

あふさかもはてはゆき、のせきもぬすたづねてとひききなばかへさじ、といふ歌をおなじやうにか、せ給て、御かたぐにたてまつらせ給ひけるこの御返事を、かたぐさまに申させ給けるに、廣幡のみやす所はたきものをぞまいらせ給たりける、さればこそなを心ことにみゆれとおぼしめしけり、

○按ズルニ、村上天皇ノ御製ハ、アハセタキモノスコシトイフコトヲ沓冠ニ隱シ題ニセサセ給ヒシナリ、

〔宇治拾遺物語三〕今はむかし、兵衛佐平貞文をばへいちうといふ、略○中 本院侍従といふは、村上の御母后の女房なり、世の色ごのみにてありけるに、文やるににくからず、返ことはしながらあふ事はなかりけり、略○中 この人のわろくうとましからんことを見て、おもひうとまばや、かくのみ心づくしに思はでありなんと思て、すい玄んをよびて、その人のひすましのかはごもていかん、